

「日本仏教と「顕道無異」の思想」

駒澤大学 奥野光賢

私事にわたって恐縮であるが、私は勤務校における全学必修宗教科目（全学部一年次生必修）の「仏教と人間」において、奉職以来一貫して松本史朗教授の『仏教への道』（東京書籍、1993 年）を教科書として講義を行なっている。松本教授は、同書の冒頭部分において、「真理は一つ」という項目を設け、次のように述べている。要約してこれを示してみよう。

仏教には八万四千の法門がある。それらは相互に異なっているが、一つの山の頂に登る多数の道のように、行きつくさきは同じである。（同書、p16）

実は松本教授は「行きつくさきは同じ」とする考え方には批判的なのであるが、一方、禪定家として知られ、また『心把握の展開—天台実相観を中心として』（山喜房仏書林、1961 年）をはじめ多数の著作をものされ、いまなお学界に少なからぬ影響を与えている玉城康四郎博士（1915-1999）は、その最晩年に次のような見解を吐露されている。同じく要約してこれを示してみよう。

ブッダの禪定を習いつづけているうちに、おのずから人類の教師たち（ブッダ、イエス、ソクラテス、孔子）の内面にも通ずるようになってきた。これらの教師たちは、それぞれ、言語、表現形式、生活習慣、歴史的背景を異にししながら、究極的には同一のことを教えている。（同博士「仏教と『人の死』・『人の命』（現代日本と仏教 I 『生死観と仏教一人の死とは何か』平凡社、2000 年、p19）

松本教授、玉城博士のご見解はそれぞれに興味深いですが、いまそれはしばらく措くとして、しばしば指摘されるように（例えば、袴谷憲昭「道歌と仏教文学」『駒澤大学仏教文学研究』第 21 号、2018 年を参照）、上記はすぐさま一休宗純（1394-1481）の作とされる次の道歌を想起させよう。

分け上る麓の道は多けれど同じ雲井の月を眺むる

分け登る麓の道は多けれど同じ高嶺の月をこそ見れ

本発表では、これらの諸点を嘉祥大師吉蔵（549-623）の特徴的經典観である「諸大乘経顕道無異」に絡め、出来るだけ本学術大会の共通テーマに沿うよう考察してみたい。

【キーワード】 吉蔵、日蓮、顕道無異、宗教多元主義